

樣式 3

技術開發課題完了報告

關東森林管理局

開発成果等	1 主伐（誘導伐）
	<ul style="list-style-type: none"> 65区画のうち、8区画について上層木を伐採したが、形態的に小面積分散伐採であり、通常の複層林施業で問題となる上木伐採に伴う上下木の被害は無かった。 生産功程についても、循環する高密路網と中央付近のストックポイントの設置もあり、効率的集材で皆伐時の功程と変わらないものとなった。
	2 上層帯の間伐
	<ul style="list-style-type: none"> 上層帯は、帯状伐採の側光効果により20年経過するなかで、広葉樹の侵入が著しく(胸高直径5cm以上が1025本/ha)、林分構造が多様化している。 侵入した広葉樹は間伐時の伐倒・搬出に伴う造林木の剥皮被害の防止に大きく貢献した。
	3 将来の見通し
	<ul style="list-style-type: none"> 計画どおり施業が進み、140年後に伐採・更新が一巡すると林齡・林相の異なる林分がランダム（モザイク的）に存在することになるものと考えられ、種の多様性や森林生態系の維持にも貢献できる林分が造成できると思われる。 将来的には160年生ヒノキを20年毎に収穫出来る上、10年毎の間伐では大径木から小径木まで多様な材が収穫できることとなり、木材生産、林業経営の面でも充分期待できるものと考えられる。 壮齡級林分で長期育成循環施業を新たに実施する場合、当試験地と同様、帯状保残型試験地を設定後、モザイク型へ転換する方法で可能と考えられる。
	4 路網整備
	<ul style="list-style-type: none"> 区域内を循環させる10t車の通行も可とする基幹作業道を作設した。 現地発生の転石による土留、末木枝条を利用した暗渠等によりm当たり作設経費(資材費)は1,098円と、低コストの作設となった。 路網密度は幹線作業道で107m/ha、トラクタ搬出路を含めると約200m/となり、路網は各伐区まで到達し、高密路網による効率的作業が可能となった。
	5 全天空写真による光環境の推移
	<ul style="list-style-type: none"> 全天空写真を利用し伐採による光環境の変化を測定したが、一定の方向を見いだせなかつた。撮影環境や解析方法などさらに検討し、標準化を図る必要がある。
	6 成果の公表
	<ul style="list-style-type: none"> 平成14年度首都圏林業技術交流発表会にて発表「長期育成循環施業と路網整備の取り組み」 「長期育成循環施業と路網整備の取り組み」第56回日本森林学会関東支部大会論文集2006